

フォス新聞 — ドイツ語圏最初の教養新聞 — (その2)

鈴木将史

1948年のベルリン三月革命によりベルリン・ジャーナリズムが当局より勝ち得た検閲と新聞発行認可制の廃止は、とりも直さずベルリン新聞業界における勢力図を、大本から描き直す結果をもたらした。当然その恩恵をこうむったものは、新興の緒新聞であり、それまで発行認可を100年以上も独占し続けてきた二大紙—『フォス新聞』並びに『シュペナー新聞』—は、必然的に「旧守派」として急進的新興新聞の攻撃に晒され、その世論に対する影響力も相対的に低下した。なかでも『シュペナー』新聞の打撃は深刻で、その社勢はついに盛り返すことなく1874年には廃刊を余儀なくされる。「教養紙」という範疇においても『フォス新聞』と覇を競ったこの新聞の終焉は、在来紙の置かれた立場を端的に物語るものである。その状況をここで手短かに総括してみたい。

『シュペナー新聞』の廃刊

(その1)でも既に述べたが、『シュペナー新聞』は、その創刊から廃刊に至るまで、常に『フォス新聞』をライバルと見なし続けた新聞だった。創刊時の発行認可申請の際には、『フォス新聞』のヨハン・ミヒャエル・リュードイガーの執拗な妨害により、発行人アンブロジウス・ホーデは発行地をベルリンならぬポツダムに「疎開」させ、1735年に„Potsdamischer Staats-und gelehrte Mercurius“を創刊している。この新聞はしかし、もっぱらベルリンの事件を報道対象としたため、その5年後にいよいよホーデが創刊するベルリンを発行地とした『シュペナー新聞』と内容的には大差ない。当時のベルリンでの新聞発行認可権は、フリードリヒ・ヴィルヘルム I世と懇意の間柄

だったリュディガーが独占していたため、ホーデはフリードリヒ皇太子(後のフリードリヒ二世(大王))になりふり構わぬ接近を図り、皇太子の即位を心待ちにするしかなかったのである¹。果たしてその成果は、フリードリヒ二世が即位するとたちどころに現れ、1740年に国王認可の証であるプロシア王家の鷲の紋章で題字を飾った『シュペナー新聞』(„Berlinische Nachrichten von Staats-und gelehrten Sachen“)が創刊する。三月革命以降の新聞では、ベルリンの紋章である熊を題字にあしらった新聞が多い中、鷲の紋章を一面に戴いたドイツ語新聞は、従って『フォス新聞』と『シュペナー新聞』の二紙しか存在しない²。(ドイツ語紙以外では、フリードリヒ二世のフランス趣味が昂じた結果40年に認可されたもののごく短命に終わったフランス語紙„Journal de Berlin“なども鷲の紋章を戴いたが、国王による、オランダ地域の世論形成プロパガンダとして度々発行されたこれらのフランス語紙は、正式な新聞とは一線を画する発行物である³)。

『ベルリン認可新聞』(„Berlinische privilegirte Zeitung“:後の『フォス新聞』)からは約20年遅れて創刊した『シュペナー新聞』だが、皇太子時代に

¹ 皇太子は仏書に深い愛着を示していたが、それが父フリードリヒ・ヴィルヘルム I世の意向には沿わず、彼は息子が密かに収集した蔵書を発見し売却してしまう。そこでホーデはその蔵書を買取り、非売品として自らの店舗に所蔵した上で、皇太子が自由に閲覧し得るべく便を図ったのである。/Heinz-Dietrich Fischer (Hrsg.): Deutsche Zeitungen des 17. bis 20. Jahrhunderts, München 1972, S. 104.

² 三月革命で発行認可制が消滅した後も、二大紙は鷲のヴィニェットを使用し続けたが、1856年には、当局が政府批判を理由に『フォス新聞』のヴィニェット使用を禁止しようとする。『フォス新聞』は、新聞の国王への忠誠心を挙げてこれを拒むが、ここからは『フォス新聞』の保守的な一面も窺うことが出来る。事実第一次世界大戦でドイツに共和制が敷かれた後も、鷲の紋章は『フォス新聞』の題字に残り続けた。/Arend Buchholz: Vossische Zeitung. Geschichtliche Rückblicke auf drei Jahrhunderte, Berlin 1904, S.153-154.

³ こうしたフリードリヒ二世によるフランス語紙は、他に„Gazette de Berlin“ (1743), „Courier du Bas-Rhin“ (1767)がある。/Hans Herzfeld(Hrsg.): Berlin und die Provinz Brandenburg um 19. und 20. Jahrhundert, Berlin 1968, S.756.



図版 I 『シュペナー新聞』題字

受けた「恩義」と、何より『ベルリン認可新聞』では今一つ意のままにならぬ世論操作を実現しようと、フリードリヒ II 世はこの新聞を重用した⁴。その典型的な例としては、内閣官房人事が他紙に先駆けていち早く『シュペナー新聞』紙上に発表された点が挙げられる⁵。また、教養欄編集長に就任したヤコブ・フリードリヒ・ランプレヒトは、ゴットシェトの高弟として師譲りのフランス古典を模範とした合理主義を紙面に導入し、『フォス新聞』の競争紙としての格式をたちまち築き上げることに成功し、結果『シュペナー新聞』は、『フォス新聞』と並ぶ「発信元新聞」と目されるようになったのである(当時の新聞は、他地域の事件に関しては、主に発信元となる当地の有力新聞の記事をそのまま転載することで、外事面を構成していた)。

ここで注目すべき点は、ランプレヒトと前後して『フォス新聞』の編集主管に取りまり、教養欄を大きく発展させたクリストロフ・ミュリウスも、ゴットシェトに師事したということである。後に王立アカデミー書記長や、王室

⁴ 第一次・第二次シュレジエン戦争(1740/1744)の際には、国王自らが『シュペナー新聞』に戦場報告記事を執筆した。これらの記事には署名がなかったため、読者は当然国王の筆になる記事とは気付かなかったが、後の研究から、国王が戦争に関連して度々新聞に寄稿したことが判明している。/Ludwig Salomon: Geschichte des Deutschen Zeitungswesens, 1.Bd., Oldenburg/Leipzig 1906, S.129/130.

⁵ Fischer, S.109.

書記をも務め、当時のベルリンにおける代表的知識人の名を縦にしたランプレヒトは、ゴットシェトの流れをくむ道徳的な啓蒙性（客観性に徹した報道態度、簡明な文体）を新聞にも導入したが⁶、ミュリウスは（その1）で既述したように、毒をも含んだ批判性を伴う教養欄を創始した編集者である。ミュリウスの後継者であるレッシングが、ゴットシェトの業績を否定したのは有名だが、『シュペナー新聞』、『フォス新聞』共ゴットシェトを教師、或いは反面教師としてその教養欄を形成した背景がある。時々の社会状況により、紙面は以降保守的、自由主義的傾向へと揺れ動き続けながらも、草創期の教養欄の傾向を、両紙は結局完全に払拭するには至らなかった。しかし、ランプレヒトとホーデの尽力により（ランプレヒトは44年に退任、ホーデは48年に死去しシュペナーに発行権を委譲）、ミュリウスが『フォス新聞』を指揮し始める48年までに、『シュペナー新聞』は教養面において『フォス新聞』と肩を並べる存在に成長していたのである。

『シュペナー新聞』は、よかれあしかれ保守的傾向の束縛を受け続けた新聞だった。創刊時に獲得した読者層—宮廷関係者、役人、軍人、保守的インテリ層など—を失いたくないばかりに（1820年代には、これらの読者の支持により、『シュペナー新聞』は『フォス新聞』の発行部数を一時的に追い抜きさえした）、1828年のロシア—トルコ戦争や30年のポーランド革命の際、新聞は民意に反してロシアを擁護し、部数を急速に減らしたのである⁷。この政治面での不人気を挽回しようと、『シュペナー新聞』は教養欄にますます労力を傾注する。その中心となったのは、45年から編集に参画したH.T. レッチャーである。彼は自他共に認めるベルリン演劇界の権威であり、彼を擁した16年

⁶ ゴットシェトの影響もあったが、当時の大部分の新聞は「官報」からの伝統を免れ得ず、編集者は（無味乾燥な）事実報道のみを心がけ、その見解が記事に反映されることは稀だった。／Deutsche Zeitungen des 17. bis 20. Jahrhunderts, S. 106.

⁷ 1828年に『フォス新聞』を4千部凌ぐ1万1千部あった部数は、45年には9千部まで減少する。／Fischer, S.111.

間『シュペナー新聞』文芸欄は、影響力において『フォス新聞』のそれを明らかに凌いでいたといえよう。だが、教養欄の名声も部数獲得の推進力とはならなかったのである。

1848年の三月革命への態度として、『フォス新聞』はジャーナリズム面から指導的役割を果たしたのに対して、『シュペナー新聞』はごく控えめな報道に終始した。だが、その後の新興新聞の攻勢は、『フォス新聞』以上に『シュペナー新聞』を直撃する。とりわけ、軍国主義的な「鉄十字」をヴィニエツトに採用し、『鉄十字新聞』(„Kreuz-Zeitung“)と俗称された„Neue Preußische Zeitung“は、反三月革命の旗幟を鮮明にした保守系政治紙で、それまで『シュペナー新聞』の主力購読層となっていたユンカー層は、より過激なこの新聞になだれを打って鞍替えした⁸。当時勢力を拡大していた左翼リベラル層に較べ、ユンカー層を中心とする保守主義層は人数に限界があり、その中で『鉄十字新聞』と覇を競う『シュペナー新聞』は、同様に新興リベラル紙『国民新聞』(„National-Zeitung“)と読者獲得を争う『フォス新聞』に較べて、より過酷な状況に置かれていたといえる。

後継ぎのいないシュペナーから新聞を譲り受けた H.S. シュピカーが 1826 年より発行人を務めていた『シュペナー新聞』も、シュピカーが 58 年に亡くなると、経営陣は集団指導体制となり、6500 部という苦しい部数ながらも発行を継続した。しかし、経営陣が従来からの保守的紙面を踏襲しようとする中、編集部は進歩主義的傾向への転換を試みるなどして新聞そのものが方向性を見失い、発行部数は更に減少する。そこで 70 年台早々に新聞は銀行シンジケートに買収され、国民主義リベラル紙として再出発を図ることとなった。とはいえ、付け焼刃的なこの転向も、『国民新聞』など同傾向のライバル紙を脅かす結果には到底結び付かず、加えて定評のあった文芸欄にパウル・ハイゼの長編小説„Die Kinder der Welt“が 73 年に連載されると、いよいよ部

⁸ ビスマルクも、新聞の設立世話人に名を連ねてはいないが、新聞の株主だった。/ Fischer, S.212.

数の減少に拍車がかかった。この小説は一見進歩主義的テーマ—社会変革、懷疑主義、自由精神などを扱っているようで、その実小市民的娯楽画報誌 „Gartenlaube“ に発表されてきた彼の自己満足的な感傷主義から、根本的に脱却し切れておらず、当時の自然主義文学者達などに痛烈な批判を浴びた作品である（ただ、フィエタンに連載された最初の小説として、この作品に意義を見出す見解もある⁹⁾）。文芸を重視し続けてきた『シュペナー新聞』が、大詰めに至ってその文芸に足をすくわれる格好となったのは、誠に皮肉な結果としかいいようがない。このようにして、新聞はついに1874年、最後は坂道を転がり落ちるように経営難に陥り、『国民新聞』へと吸収され、その135年の歴史に幕を下ろすのである。『シュペナー新聞』の没落は、「半官報」として政府側の代弁者であり続ける編集態度が、近代ジャーナリズムの中では如何に時代遅れとなったかを如実に物語るものである。近代ジャーナリズムは、ゴットシェットの唱えた「徹底的に客観的な報道姿勢」さえも許さず、右であれ左であれ、民衆の意向を先取りした論陣をメディアに要求した。そして、教養欄といえど、その傾向とは無縁ではいられなかったのである。

『フォス新聞』教養欄最後の黄金時代

さて、三月革命以降の新聞業界に対して、政府は検閲こそ実施しなくなったものの、批判的な記事を掲載した新聞には、押収や出版差し止めという手段で、影に日向に弾圧を続行した¹⁰⁾。国王認可紙として王室への忠誠を誓う

⁹⁾ Gustav Dahms: Das literarische Berlin. Illustriertes Handbuch der Presse in der Reichshauptstadt Berlin. Berlin o.J.(ca.1900), S.16./連載小説というジャンルは、文芸雑誌への連載から始まり、ドイツでは、ヴィーラントが自ら編集する „Teutscher Merkur“ に載せた „Die Abderiten“ (1780) などがその先駆けとされる。日刊新聞連載小説は、フランスにあつては19世紀前半から、デュマやバルザックにより興隆期を迎えるが、ドイツでは半世紀ほど遅れ、特にカール・マイの冒険小説により、新聞の発行部数さえ左右する重要な紙面となる。

¹⁰⁾ こうした当局による恣意的な出版弾圧は頻繁に行なわれ、1870年の12月には、88頁もあるクリスマス前の日曜版を含めて、『フォス新聞』は三度も発行が差し押さえられたりしたが、1874年に制定された帝国出版法により、ようやく出版の

『フォス新聞』も、政府の政策を批判した廉で度々新聞を押収され、特にビスマルクの対ロシア友好政策に苦言を呈した1863年には、他のベルリン5紙と共に発行差し止め処分を受けている¹¹。

この時期、『フォス新聞』教養欄の屋台骨を背負い続けたのは、フリードリヒ・ヴィルヘルム・グービッツである。彼は1823年から、70年に死去するまで、実に47年の長きに亘って教養欄編集に携わり、同紙のまさに長老的存在であった。木像彫刻家という風変わりなキャリアで名を成した彼は、同時に教養欄編集者として、“Berliner Morgenpost”や、『シュペナー新聞』といった有力紙に参画し、『フォス新聞』に移ってからは、レッシングの演劇論を踏襲した舞台中心の評論を展開しつつ、初期自然主義的作品に対しても一定の理解を示した。このグービッツの死後、教養欄編集に参画するのがテオドル・フォンターネである。

フォンターネの貢献

ドイツにおいて、軸足を一般新聞に置きながら文学活動を展開した最初の有力作家はフォンターネといえよう。彼以前の作家も、レッシングの例を倣つまでもなく、そのほとんどが時の新聞とは無縁ではありえなかったが、それは自由寄稿者として希薄な関係であったり、編集に参画するとしても一時の腰掛け的なものであったり、さもなければ新聞そのものが、自ら発行する私的な文芸紙であったりしたのである。

政府の通信員として1855年からロンドンに居住し、その当時から『フォス新聞』などにも記事を書き送っていた彼は、59年に帰国するも、政府に広報職を見付けることが出来なかった。苦境に陥った彼に編集部ポストを申し

原則的自由が確立する。／Buchholz, S.161-166.

¹¹ 他の5紙とは、“National-Zeitung”, “Volkszeitung”, “Berliner Allgemeine Zeitung”, “Berliner Reform”そして“Spencersche Zeitung”である。即ちこの時点で既に『シュペナー新聞』は、以前にはあり得なかった政府批判記事を載せ始めていたことが分かる。／ibid., S.159-161.

出たのが、『フォス新聞』と『鉄十字新聞』である。この内、筋金入りの保守系新聞である『鉄十字新聞』にはフォンターネ自身不安を抱いた向きもあったが、そのフランス語圏教養欄編集を担当していた詩人G.ヘーゼキールの人柄と才能に引かれ、教養欄英語圏編集担当として、『鉄十字新聞』入社を「気は晴れぬもの」決意することとなる。だが選択は正しく、64年と66年の戦争をルポルタージュできたこと、『マルク・ブランデンブルク紀行』など大作に着手することができたこと、また編集活動と社交を中心とする生活を送り得たことから、この『鉄十字新聞』時代をフォンターネは、生涯で最も幸福な期間であったと、後に回顧している¹²。確かにこの感想は、妻子を残した故国への郷愁に絶えず苛まれ続けたイギリス時代や、普仏戦争取材時にスパイ容疑で身柄を拘束されたり、妻と不仲になった『フォス新聞』時代を鑑みると頷けるものだろう。しかし後になると、保守系カトリック・ユンカー層の機関紙である『鉄十字新聞』に、教養欄担当といえど本質的な言論の自由がないことを痛感し、自らに「そもそも使える間は油をさしておく機械の歯車程の価値¹³」しか認められなくなったフォンターネは、70年5月に編集長ポイトナーと衝突し、そのまま『鉄十字新聞』を去る決心をする¹⁴。そして同年8月に『フォス新聞』と、王立劇場劇評担当としての契約を取り交わす訳だが、死去したグービッツの後任とはいえ、彼に期待された役回りは、文芸評論のみならず国外ルポルタージュも手掛けるジャーナリストとしての記者活動も含まれていた。一体当時の大新聞といえども、現代ほど世界中に特派員を常

¹² Theodor Fontane: Von zwanzig bis dreißig. Der Tunnel über der Spree, 7. Kap. (Th.F.: Werke, Schriften und Briefe, III/4, München 1973) S.419.

¹³ Theodor Fontane: Briefe, IV/2, München 1979, S.284.

¹⁴ ポイトナーとの衝突の状況を唯一知らせる彼の書簡によると、ポイトナーが彼をヘーゼキールと比較し、「スカンジナビア」について言及したということが契機であるらしいが、その詳細は不明である。いずれにせよ、フォンターネ自身も述べているように、きっかけは「些細な事」であり、『鉄十字新聞』の精神的・時間的束縛(彼は毎日編集部に通勤していた)に彼の不満が鬱積したことが本質的な原因であろう。後に続く彼と『フォス新聞』の関係は、より緩やかなものである。/ibid. S.306ff.

駐させていた訳ではなく、事件が起こるたびに駆けつける「遊軍記者」も報道の重要な役割を担っていた。『フォス新聞』にはこのようなジャーナリストとして、フォンターネが編集部入りした時期はルードヴィヒ・ピーチュが活躍しており、パリ万博など国際的イベントの報道は、彼がほぼ一手に受け持っていた。

フォンターネの『フォス新聞』参画は、彼にとっても、また新聞にとっても極めて意義深いものだった。なぜなら、彼は実質的な文芸評論活動を、この時点より始めることになる訳であるし、また『フォス新聞』フィエタンも、彼により最後の黄金時代を迎えたときさえ形容し得るからである。彼は1870年8月のシラー『ヴィルヘルム・テル』を皮切りに、以降1891年1月のハウプトマン『寂しき人々』まで、コンスタントに劇評を掲載し続けるが、『テル』に始まりハウプトマンに終わったということ自体、彼が有した文芸思潮への鋭敏な嗅覚を、象徴的に物語っている。即ち、帝国建国に沸き立つ70年当時のドイツでは、『テル』が再び人気を集め、その王立劇場における8月17日の上演について、(演出は気に入らなかったものの)全体として好意的に批評したため、彼の劇評はユンカー層にも一定の支持を得ることができたのである。また、この処女劇評での経験は、フォンターネ自らにも強い印象を残したらしく、『テル』劇評経験を述懐して、「(魅了された作品ならば)心から賛美する喜びを、瑣末な失敗をあげつらうことにより、台無しにしてはならない。そんなことをしては、自身の感慨も損なうことになってしまう¹⁵」と後に述べているように、彼の評論活動の「原体験」となるものだった。従って、フォンターネの評論はウィットとエスプリに富み、特定の作家や作品の酷評を避けた穏やかなものである。この点でフォンターネは、A.ケルなど戦闘的な表現を好んだ後の評論家達とは対照的な存在であったが、その評論スタイルがまた、日刊総合教養紙である『フォス新聞』の文芸欄にマッチしていた

¹⁵ Theodor Fontane: Kritische Jahre—Kritiker-Jahre (Th.F.: Werke, Schriften und Briefe, III/4), München 1973, S. 1035.

のも確かである。逆にいえば、余りに先鋭的な評論姿勢は『フォス新聞』文芸欄とは相容れぬものであった。自然主義演劇の開拓者となったオットー・ブラームがその好例であろう。

フォンターネの業績においては、創作活動並びに評論活動の他に、同時代文学の育成も重要な位置を占めている。広義には、世紀転換期文学の確立を作家としてのみならず、評論家としても積極的に押し進めたことも挙げられようが、直接的な貢献としては、『フォス新聞』編集部若手文学者を招聘し、その活動を支援したことがある。ブラームはこのようにして、1881年の『フォス新聞』劇評にデビューする訳だが、彼の舌鋒鋭い批評は、正にフォンターネのそれとは対極をなすものであった。82年に当時人気の高かったヴァルナー劇場の演出を手ひどく批判したこと¹⁶によって、劇場との関係を悪化させ、結局彼は85年に『フォス新聞』を去る。しかしその期間中に、世紀末ドイツ演劇界に多大な影響を与えたマイニンガー宮廷劇場を紹介するなど、彼の演劇評論家としての下地は『フォス新聞』時代に形成されたといっても過言ではない¹⁷。

ブラームは、『フォス新聞』を離れた後、リベラル系の政治週刊誌 „Nation“ に劇評を寄せ、自然主義文学を推進していくが、彼の後任として『フォス新聞』編集部入りしたのがパウル・シュレンターである。彼の筆致はブラームほど激烈ではなく、以降1898年まで彼と『フォス新聞』の関わりは続く。しかし、ブラームが89年に設立した会員制演劇鑑賞会 „Freie Bühne“ にシュレンターが設立発起人として名を連ねているように、二人の文学観は非常に近く、シュレンターはブラームのいわば「代弁者」として劇評を執筆していたとさえ見ることができよう。後にブラームがベルリン「ドイツ劇場」の、

¹⁶ 「一度言っておかなければいけないが、まっとうな芸術的矜持を、ヴァルナー劇場監督は、ますます失いつつあるようだ。さもなければ、昨夜の如きぞんごいな演出は考えられない。」/Vossische Zeitung, 15.3. 1882.

¹⁷ 『フォス新聞』自身は、ブラームの貢献を高く評価はしておらず、社史(Anm.2)の中で、彼についてはひとことも触れていない。

シュレンターがウィーン「ブルク劇場」の監督に就任することにより、ドイツ語圏の演劇界を両者が名実共にリードすることとなるが、彼らが共に『フォス新聞』編集部にて在籍しフォンターネの薫陶を受けたという事実は、『フォス新聞』文芸欄の当時の高水準を物語るものである。また、戯曲を書かなかったフォンターネが、劇評以外にも両者を通じてドイツ演劇に間接的な貢献を果たしたことも理解されよう。その最も際立つ成果が、ゲルハルト・ハウプトマンへの支持であったことは論を俟つまでもあるまい。

ブラームが、89年10月20日に催されたハウプトマンの処女戯曲『日の出前』初演を、鉄の意志を持ってやり遂げたことは周知の事実だが、この問題作を会員制演劇鑑賞会にせよ上演するにあたっては、そのふた月ほど前から関係者達の間で頻繁にやりとりが行なわれた¹⁸。„Freie Bühne“の立ち上げ公演となったイプセン作„Gespensster“は成功裡に終わり、会をいよいよ軌道に乗せようという第2回公演に、全く無名な新人作家ハウプトマンの問題作を初演しようという試みは、当然の如く内外から強い憂慮の声が上がったものの¹⁹、その中で、当事者達を除き作品を最も高く評価したのがフォンターネである。ハウプトマンは8月末に国内の有力文学者約80名に作品を郵送し評価を仰いだ、フォンターネは、同様に送付を受けたブラームやH. ハルトとほぼ同時期に作品の価値を見抜いたのである²⁰。彼のハウプトマンへの肩

¹⁸ Vgl. Masafumi Suzuki: 1889: Ein Querschnitt durch die Literatur um die Jahrhundertwende - hinsichtlich der Gründung der „Freien Bühne“ von Otto Brahm -, in : Otaru University of Commerce. The Review of Liberal Arts, No.91, Otaru 1996, S.145-163.

¹⁹ 旧来の保守的な文学者層は勿論だが、雑誌„Gesellschaft“を本拠とするミュンヘンの自然主義者達 (C. プライプトロイ, C. アルベルティなど) が先行発売された戯曲を評価せず、„Freie Bühne“内部にも作品を問題視する向きが少なくなかった。そのため会員制鑑賞会にも関わらず、当日の劇場は賛否渦巻く大荒れの初演となるのである。/C. Cowen: Hauptmann-Kommentar zum nichtdramatischen Werk, München 1980, S.42.

²⁰ フォンターネはそれどころか、新星ハウプトマンを、自然主義文学の教祖と崇められていた当時のイプセンよりも評価した向きがある。彼は作品読了直後に書いた1889年9月14日付の書簡で、「彼 (ハウプトマン)こそ真の現実だ。(中略)

入れは並々ならず、その意気込みぶりは、彼にしては極めて稀といえる二日に互り『フォス新聞』に掲載された劇評と、その20日前に同紙に執筆された„Gespensster“評を比較すると容易に理解されよう。即ち、9月30日上演の„Gespensster“についての劇評で、フォンターネは従来の演出が求めた「楽園」の喪失と、それに代り現代演劇が求めるべき「生活の園」の存在を説き、探求の途上にある現在の道程を、豊かな土地へと至る「荒野の道」と形容した。そして道を辿る結果、「真の美しさ」を見定める眼が養われるが、イプセン作品には、この美がまだ欠けていると彼は喝破しているのである²¹。この劇評執筆時に、フォンターネは既に『日の出前』を読んでおり、20日後の『日の出前』評を参照すれば、彼の中ではハウプトマンが明確に意識されていたことが窺える。『日の出前』評では、彼自身も作品の評価が二分することを予測しているが、自然主義信奉者達が次々と作品を弁護する中でも、演劇評論界で相当の権威を有するフォンターネの高評価が、ハウプトマンの、ひいては„Freie Bühne“の活動にとって強力な追い風になり得たことは明白である。また、19世紀後半のベルリン演劇及び評論界が、A. ボイエレ (Bäuele) や、L. シュパイデル (Speidel) や、D. シュピッツァー (Spitzer) や、H. ヴィットマン (Wittmann) らの著名な評論家を擁したウィーンと比較して、質・量共に見劣りしていたことは否めない。そうした中であって、ベルリンでのフォンターネの活躍は、世紀転換期に入り、ベルリン演劇界が自然主義を梃子としてウィーンと一気に肩を並べる呼び水になったともいえよう。フォンターネ自身は、自然主義文学者達と異なり、ハウプトマンと個人的関係を深めることはなかったが²²、自然主義から常に一定の距離を置きながらも、彼と

イプセンは、現実性と並行する副次性に多少偏執し、偏執が昂じて全く陳腐化しているため、ハウプトマンの現実を彼は欲しながらも達成していない。」と述べている。／Theodor Fontane: Briefe 1879-1889 (Th.F.: Werke, Schriften und Briefe, III/3), München 1980, S. 725.

²¹ Vossische Zeitung, 30.9.1889.

²² 現存するフォンターネの書簡中、ハウプトマンに宛てたものは三通しか確認されていない。そのうち二通は、1889年9月12/13日と立て続けに書かれた『日

『フォス新聞』は、ベルリン自然主義文学そしてベルリン世紀転換期文学そのものの発展に少なからず貢献したのである。

『フォス新聞』売却から廃刊へ

1870年以降、帝国建設と特需景気の追い風を受けて踊り出たベルリン新聞業界の大立者として、3人の新聞出版人の名を挙げることが出来る。ひとりにはベルリン最初の広告代理店を設立することにより、購読料を主体としてきた新聞経営のなかで広告料収入の比重を高め、1871年に『フォス新聞』と並ぶ高級紙 „Berliner Tageblatt“ (BT) を創刊するルドルフ・モッセ、もうひとは、地方欄に重点を置いた新趣向の新聞 „Berliner Lokal-Anzeiger“ (BLA) を、当初購読料を取らずに (!) 広告料だけで発行し、瞬く間に20万の読者を得たアウグスト・シェール、そして以下に詳述する3人目は、後にドイツ最大の新聞コンツェルンを築き上げるレオポルト・ウルシュタインである。

ウルシュタインは1826年、ニュルンベルク近郊のフルトで手広く営業する紙問屋に三男として生まれた。一家が営業の拠点をライプツィヒに移した後、彼は48年にベルリンに出てやはり紙問屋を経営し始め、暫くは家業の発展に尽力する。その甲斐あって彼はベルリン財界で次第に確固たる地位を占めるに至るが、その間も新聞発行に興味を示すことは殆どなかった。この点でウルシュタインは、新聞発行の野望を抱いて上京した先の二人とは本質的に異なっている。しかし、次第に彼の興味は政治に向き始め、ベルリン市会議員に選出されるのが「統一年」1871年である。これよりウルシュタインは、

の『出前』読後の感想を興奮気味に語ったもの、そして三通目は、ハウプトマンが第二作『平和祭』をフォンターネに献じたことに対する、90年1月16日付の礼状である。三通目は、一・二通目と比較するとよそよそしさを禁じ得ない文体であり、プラームやシュレンターと較べても、何故フォンターネが最初の興奮時期を経た後、ハウプトマンへの距離を置き続けたのかは、今後の研究の成果を待ちたい。

自らの主義主張を世論に訴える術を模索し出し、77年の市議員選落選を契機に新興国民リベラル新聞 „Neues Berliner Tageblatt“ を買収するのである（買収後程なく „Deutsche Union“ と改名）。奇しくもこの新聞は、モッセが創刊したBTの編集部内での軋轢により、BTより分裂した新聞である。新聞買収と同時にウルシュタイン出版社も設立され、以降ウルシュタイン社は、次々と新聞を創刊し、同時に経営難に陥った有力新聞をも買収していく。

1878年に2年前に創刊していた徹底自由主義紙 „Berliner Zeitung“ をウルシュタイン社は買収し、87年には夕刊娯楽紙 „Berliner Abendpost“ を独自に発行、94年に90年創刊のグラフ紙 „Berliner Illustrierte Zeitung“ を傘下に収め、98年には後の主力紙となる総合朝刊紙 „Berliner Morgenpost“ (BM) を創刊する。1909年には06年に創刊していたリベラル民主主義紙の „Berliner Allgemeine Zeitung“ を買収、この時点で、既に新聞コンツェルンの総帥として不動の地位をベルリンに築いたウルシュタインだが、彼になお欠けていたものは、社の看板ともなる「名門紙」の存在だった。

さて、当時の『フォス新聞』は、その教養欄の健闘も空しく、19世紀後半には強力なライバル紙達の攻勢に部数が伸び悩んでいた（1848年に2万4千部を記録して以降、60年以上に亙り発行部数はほとんど増加していない）。だが、社主カール・ロベルト・レッシングの眼には、事態が深刻な経営難とは映らず、リベラリズムを標榜しながらも、伝統的な紙面を頑なに保持し続けたのである。なぜなら、読者の階層は依然として最高水準にあったため、その購買力を当てこみ広告掲載依頼がひきもぎらなかつたからである。（なかでも日曜版には広告が殺到し、そのため本文は10頁にも関わらず新聞全体は60頁になるほどだった。）だが、19世紀末から20世紀初頭にかけて4倍近くもの飛躍的な人口増加を示した帝国首都ベルリン²³ にあって、購読者数を増

²³ 1871年当時、82万6千人であったベルリンの人口は、1912年には300万人以上に膨れ上がった。／Jürgen Schutte / Peter Sprengel (Hrsg.): Berliner Moderne 1885-1914, Stuttgart 1987, S.33.

やすことができなかつた事實は、穩健な教養主義を底流とした当時の紙面が一般大衆の好みと如何に乖離していたかを物語るものだろう²⁴。人口増加に伴う購読者増加の最大の受け皿となった新聞は、ウルシュタイン社の BM であり、20 世紀初頭には 40 万部の発行部数を数えるまでに至る。

レッシングも、この事態を座視しようとした訳ではないが、なにぶん 80 を越える高齢では改革もままならず、加えて息子のロベルトも病弱であったため、20 世紀に入るとレッシング家の新聞社に対する求心力は一気に衰えを見せる。ここで発言力を増してきたのが、レッシング家の傍流であるミュラー家であり、その結果、フォス新聞社は 1909 年に、それまでの合名会社から、ミュラー家の持分が過半を占める有限会社へと転換するのである。この有限会社化で、新聞社の経営も安定するかに見えたが、数ヵ月後には新聞とは縁の薄いミュラー家から、持分を外部に売却する者が相次いだ。結局、1911 年に C.R. レッシングが死去し、ロベルトが自らの持分を銀行に譲渡したことで、『フォス新聞』は完全にレッシング家の手を離れたのである(『シュペナー新聞』の時も同様だが、当時経営難に陥った新聞を、銀行が買収する例は珍しいものではなかつた)。『フォス新聞』を買収した「シュパイアー・エリッセン銀行」は、銀行経営の一助にするべく新聞の経済欄を大幅に強化し、即ち『フォス新聞』は教養総合紙から経済紙への転換を図ろうとした訳だが、レッシング家の許ではあり得なかつた経営陣と編集部との軋轢により、紙名変更の他²⁵ 紙面の抜本的な刷新はなされぬまま、経営は更に悪化した。そこで、

²⁴ 例えば、『フォス新聞』の一面は、必ず官報の主要記事の抜粋から始まり、その後主要事件の大見出しが続くというものだった。官報記事は、時には一面の 10 分の 9 を占めることさえあり、そうなると、一面記事は実際には二面で報道されるという、現代では想像し難い紙面構成が『フォス新聞』にはしばしば見られたのである。

²⁵ この時点でついに新聞の通称『フォス新聞』が新聞の正式名称となり、それまでの正式名『国王認可ベルリン政治教養新聞』(„Königlich privilegirte Berlinische Zeitung von Staats- und gelehrten Sachen.“) は副題となった。正し、ゴットホルト・エフライム・レッシングの時代に短期間 (1751-1753) だけ『フォス新聞』が正式名称となった時期がある。

新聞を所詮営利手段としか見なさない銀行は、買収の2年後には新たな売却先を模索し始める。候補はモッセとウルシュタインだったが（シェールはBLAが成功するも、放漫経営がたたり、財政的には逼迫していた）、『フォス新聞』と並ぶ高級紙BTを発行するモッセは、新聞獲得に食指を動かすことはなく、大衆紙BMとの棲み分けが可能とみたウルシュタイン社が、1914年に社としてもそれまでの最高金額（800万マルク）で『フォス新聞』を買収するのである。

ウルシュタイン社にとって、この買収劇はしかし経営的に見て必ずしも得策であったとは断じ難い。なぜなら、先の買収騒ぎで『フォス新聞』の編集部は殊の外猜疑心を強めており、新たな発行元となったウルシュタイン社は、編集長（ヘルマン・バハマン）留任を始めとして、編集部内人事に大鉈を振るい得ず、紙面に関しても、さほどの改革を成し得ることはできなかったからである（名目上の編集長は、BMに携わっていたゲオルク・ベルンハルト²⁶だったが、彼が編集の実質的指導者となるのは、バハマンが没した1920年からのことである）。結局、ウルシュタイン社は『フォス新聞』に対して、他の自社新聞とは一線を画したまま、BMの5分の一程度の発行部数（最高は1931年に記録した8万1千部）からくる赤字を補填しつつ、その民主リベラル名門紙という「暖簾」を守り続けたのである。新聞がまだレッシング家の所有だった1911年とウルシュタイン社に移った1918年の題字周辺を較べてみても、その様式に殆ど変化が生じていないことが理解されよう（図版II参照）。若干の違いといえば、左下の発行元と、中央下の発行所の変更（18年の„Kochstraße“は、ウルシュタイン社本社の住所）、それに、一次大戦後王制が廃止され、新聞副題から「国王認可」（„Königlich privilegirte“）の2語が消えたこと程度である（もともと、「認可」という呼称自体、新聞発行認可制

²⁶ 彼がユダヤ系であり、その後ユダヤ系編集者が次々と参画したことがフォス新聞の廃刊を早めたことは否定できない。彼は30年に編集部を解雇された後33年にはバリへと亡命し、当地において唯一亡命者のみの手による亡命新聞として名高い„Pariser Tageblatt“を創刊する。

r 648. Morgen-Ausgabe.

Berlin.

Sonntag, 24. December 1911.

Vossische Zeitung

Gründet 1794

Königlich privilegierte Berlinische Zeitung von Staats- und gelehrten Sachen.

Die Vossische Zeitung erscheint zweimal täglich (sonntags und abends), am Sonn- und Festtage nur einmal. Jedes Sonntags die illustrierte Beilage „Zeitbilder“, Sonntags Belegen und Bucherzählungen, Mittwochs die „Wanderer“, Donnerstags die „Kunst- und Literatur“, Freitags die „Wissenschaften“, Samstag die „Kunst- und Literatur“, Sonntag die „Kunst- und Literatur“.

Das Verlagsamt befindet sich in Berlin, Unter den Linden 10, im Hause des Herrn Voss, gegenüber dem Hoftheater.

Das Verlagsamt befindet sich in Berlin, Unter den Linden 10, im Hause des Herrn Voss, gegenüber dem Hoftheater.

Druckerei: Ullstein & Co., Verlagsamt für die Beilagen des Vossischen Zeitungsamtes, Unter den Linden 10, im Hause des Herrn Voss, gegenüber dem Hoftheater.

Druckerei: Ullstein & Co., Verlagsamt für die Beilagen des Vossischen Zeitungsamtes, Unter den Linden 10, im Hause des Herrn Voss, gegenüber dem Hoftheater.

M 579 Morgen-Ausgabe
A 814

Berlin

Dienstag, 12. November 1918

Vossische Zeitung

Gründet 1794

Berlinische Zeitung von Staats- und gelehrten Sachen

Die Vossische Zeitung erscheint zweimal täglich (sonntags und abends), am Sonn- und Festtage nur einmal. Jedes Sonntags die illustrierte Beilage „Zeitbilder“, Sonntags Belegen und Bucherzählungen, Mittwochs die „Wanderer“, Donnerstags die „Kunst- und Literatur“, Freitags die „Wissenschaften“, Samstag die „Kunst- und Literatur“, Sonntag die „Kunst- und Literatur“.

Das Verlagsamt befindet sich in Berlin, Unter den Linden 10, im Hause des Herrn Voss, gegenüber dem Hoftheater.

Das Verlagsamt befindet sich in Berlin, Unter den Linden 10, im Hause des Herrn Voss, gegenüber dem Hoftheater.

Druckerei: Ullstein & Co., Verlagsamt für die Beilagen des Vossischen Zeitungsamtes, Unter den Linden 10, im Hause des Herrn Voss, gegenüber dem Hoftheater.

Druckerei: Ullstein & Co., Verlagsamt für die Beilagen des Vossischen Zeitungsamtes, Unter den Linden 10, im Hause des Herrn Voss, gegenüber dem Hoftheater.

図版II 1911年(上)と18年の『フォス新聞』題字

が廃止された1848年以降は意味を持たない単なる飾りであった。)27。

『フォス新聞』は、この後1934年に廃刊する。廃刊の理由は、ナチスによるユグヤ系リベラル紙弾圧という極めて政治的な背景によるものであり、編集面や経営面のみから論じ得る問題とは趣を異にするため、小論ではその詳述・考察を控えたい。『フォス新聞』の廃刊については、ナチスの言論統制政策を踏まえ、やはり同時期に廃刊となったBTや„Frankfurter Zeitung“ (FZ) などと比較しながら、Goldstein/Frei/Schmitz/Mollらが詳細に論じている²⁸。

²⁷ Peter de Mendelssohn: Zeitungsstadt Berlin, Berlin 1959, S.161-177.

²⁸ Moritz Goldstein: Vom Leben und Sterben der Vossischen Zeitung, in: Hundertjahre Ullstein 1877-1977. Bd. 2, F.a.M. / Berlin 1977, S.141-165./ Norbert Frei /Johannes Schmitz: Journalismus im Dritten Reich, München 1989./Helga Moll: Der Kampf um die Weimarer Republik 1932/33 in der Berliner demokratischen Pressen. Für und wider das „System“, „Berliner

しかし、この場で取り上げるべき教養欄も、フォンターネが去った1890年以降、文壇・演劇界への影響力を徐々に失っていった。確かにフォンターネの後も、『フォス新聞』は1899年にA. エレッサー²⁹、1913年にはS. グロスマン³⁰といった当代一流の文芸評論家を編集部に招いたり、24年からはパリ特派員にK. トゥホルスキーを任用するなど、フィエタンの充実を図ったが、総合紙の教養欄が文芸思潮をリードする時代は既に過ぎ去っていた。自然主義を嚆矢とする世紀転換期文学は、大量印刷・迅速流通が可能となった雑誌を主力媒体として発展し、例えばハウプトマン—„Neue Rundschau“—フィッシャー社を典型とする、作家—文芸雑誌—雑誌出版社の「近代文芸三位一体」関係には、新聞教養欄の入り込む余地など見出しようもなかったのである。加えて、教養面重視の態度をリューディガー以来貫いてきたレッシング家の手を離れ、銀行並びに新聞コンツェルンの許で（さして成功した訳ではないが）実益性を求められたことにより、新聞に政治経済紙としての位置付けがより強まったことも否定できない。ドイツ高級紙「御三家」ともいえる『フォス新聞』、BT、FZの中で、ウルシュタイン時代の『フォス新聞』は、他の2紙に較べ、記事のスカンダル性や扇情的な見出しがやや目立つようになる。3紙の内、『フォス新聞』が最も早く廃刊したのは、富裕ユダヤ人を重要な購買層に持ち、編集部内にも多くのユダヤ人を抱えていた事情による点が大いなもの、BTやFZを尚5年ほど延命し、国家社会主義の国際的プロパガンダ紙に利用しようとしたナチスの思惑が、『フォス新聞』には働かなかった点も無視はできない。つまり世論に対する影響力を、末期の『フォ

Tageblatt“, „Vossische Zeitung“, „Germania“ u. „Vorwärts“. Diss., Wien 1962.

²⁹ Arthur Eloesser (1870–1938)。シュレンターの後任として『フォス新聞』フィエタン編集に参画。やはりハウプトマンらの自然主義を評価する。1914年にレッシング劇場演出担当として転出、28年に『フォス新聞』へ再び戻り、33年にナチスの圧力により辞職する。

³⁰ Stefan Grossmann (1875–1935)。ウィーンで文芸評論・雑誌編集活動をしていたが、1913年ベルリンに移り、翌年から『フォス新聞』入りする。20年からは総合教養雑誌 „Das Tage-Buch“ を創刊し、同様の有力誌 „Die Weltbühne“ のラ

ス新聞』はそれほど失っていたのである。1930年代に入ってから、ナチスの意向を敏感に感じ取っていた新聞は、ベルンハルト、J. エルバウ、E. ヴェルターと立て続けに編集長が交替したものの抗し切れず、34年3月31日『フリッシュマン新聞』から数えて318年に亙る歴史に幕を引いた。最終号に載った社告 „Ende und Anfang“ は、以下の言葉で締め括られている。

「国家的目標と精神的同一化を混同せぬ者や、国民即ちドイツ国民そしてドイツ精神の何たるか、何となるであろうか、その豊饒且つ多彩な全体を知悉する者は、過去に謝して別れを告げつつも、貧困がもたらす戦慄と戦わねばなるまい。だが、斯くなる者は、これらの戦慄をうち捨てるのだ。何故なら、待機と遂行、忍耐と信念について訓を垂れる意志の無い者には、数百年に渡る道を見据えることなど意味を持たぬからである。課される試練は常に新しい。」³¹

その終焉は余りに寂しいものであったが、しかしなお、19世紀末に円熟期を迎えた『フォス新聞』は、政治・文化記事のみならず、市場関連記事 „Finanz und Handelsblatt“, 不動産・抵当情報 „Grundstück und Hypothek“, 工業経済記事 „Umbau in Technik und Wirtschaft“, 高等教育関連記事 „Hochschulblätter“, 行楽記事 „Für Reise und Wanderung“ や、イラストが豊富な日曜版 „Zeitbilder“ など、当時にしては極めて多彩な紙面を誇り、ベルリンのみならずドイツを代表する高級名門紙であったことに変わりはない。当時の教養欄における定期的寄稿者は、クラブント、ロダ・ロダ、K. エドシュミット、O. フラーケ、E. ハイルボルン、A. ポルガー、Th. モムゼンなど、また不定期に寄稿した者としては、H. ヘッセ、R. ムーゼル、I. ザイデル、A. デーブリーン、W. ハーゼンクレーバー、H. グリム、マン兄弟など、多数の作家・文芸評論家が関与していた。

以下に『フォス新聞』関連年表を掲載し、小論の付録としたい。

イバル誌に育て上げた。

³¹ Vossische Zeitung, Nr.77, Berlin 1934 3.31.

"Vossische Zeitung" 関連年表

ベルリン新聞界関連年表 (VZ 廃刊まで)

- 1614 (世界最初の新聞 "Avisa Relation oder Zeitung" ブラウンシュヴァイク近郊ヴォルフエンビュッテルで発行。)
- 1617 ブランデンブルク宮廷使節長 Christoph Frischmann がベルリン最初の新聞 "Frischmann-Zeitung" を発行。1628年よりベルリン当局の検閲下に置かれる。
- 1618 Christoph 死去。弟 Veit 兄の職と共に新聞発行を引き継ぐ。
- 1655 ベルリンの印刷業者 Georg Runge が新聞発行認可獲得。
- 1661 Veit 死去。Runge が新聞を引き継ぎ, "Berlinische Einkommende Ordinari und Postzeitung" と命名。
- 1681 Runge 死去。その妻 Catharina が新聞発行を継続。
- 1704 Catharina, 再婚した夫にも先立たれ子供もいなかったため, 新聞を印刷業者 Johann Lorenz に売却。出版業者 Johann Michael Rüdiger, 新聞発行認可獲得。
- 1721 J.M.Rüdiger の息子 Johann Andreas Rüdiger, 新聞発行認可獲得。同時に Lorenz の認可取消。Lorenz の新聞を "Berlinische privilegierte Zeitung" と改名して引き継ぐ (認可料年 200 ターラー)。
- 1748 教養部門編集長に Christlob Mylius 就任。新聞内に教養面 "Von gelehrten Sachen" 新設。Gotthold Ephraim Lessing を編集見習に呼ぶ。
- 1750 Mylius, 社主 Rüdiger と衝突し新聞を去る。後任 Lessing。
- 1751 Johann Andreas Rüdiger 死去。故人の遺志により新聞の所有権は, 娘婿の書籍商 Christian Friedrich Voss (大フォス) に相続。新聞の名称は, "Berlinische privilegierte Zeitung" のまま。
- 1755 Lessing, 編集から撤退。60年代半ば
- 1740 ポツダムの書籍商 Haude, "Berlinische Nachrichten von Staats- und gelehrten Sachen" (『シュベナー新聞』) 創刊。

- には弟 Karl Gotthelf も編集に参画。
- 1776 Karl Gotthelf Lessing, Voss の娘 Marie Friederike と結婚。
- 1784 Karl Philipp Moritz, 翌年まで教養欄編集長を務める。
- 1785 紙名, "Königliche privilegierte Berlinische Zeitung von Staats-und gelehrten Sachen" と変更。以降 1911 年までこの名称を継続。
- 1790 Voss, 息子の Christian Friedrich (小フォス) に新聞の発行権と書店経営を委譲。
- 1795 大小フォス相次いで死去。Marie Friederike Lessing が新聞を相続。
- 1802 Johann Friedrich Unger, 新聞の共同発行人となる。(1804 まで)
- 1806 編集長に S.H.Catel 就任。
- 1806 最初の日刊紙 "Der Telegraph" 創刊。この新聞はしかし、フランス占領軍のプロバガンダ紙だった。
- 1810 Heirich von Kleist, ベルリン第3の新聞 "Berliner Abendblätter" 創刊(初の真の日刊紙)。しかし、『フォス新聞』等の圧力もあり、半年後に廃刊。
- 1813 辛辣な劇評に端を発する王立劇場監督 Iffland との衝突。Iffland 曰く、「王立劇場初演作品は、3度上演されて初めて、新聞での劇評が許されるべきである。」→ 1828 年に実際に法律化される。
- 1813-1815 解放戦争における市民の戦意発揚に貢献。
- 1824 それまでの週3日発行から、祝祭日を除いた日刊となる。文化欄編集者に Friedrich Wilhelm Gubitz (彫刻家) を招聘。
- 1825 編集長に Christian Friedrich Lessing (Marie Friederike の息子) 就任。
- 1826 教養欄編集者に Ludwig Rellstab (詩人・音楽評論家) を招聘。
- 1828 Marie Friederike 死去。Christian Friedrich とその妹 Ernestine が新

- 聞を相続。
1842 部数躍進 (24000 部)。ドイツ連邦最大の新聞となる。
- 1848 三月革命。新聞検閲並びに新聞発行認可制廃止。『フォス新聞』3月20日付「歓喜の号外」(“Extrablatt der Freude”)発行。編集長に Otto Lindner 就任。
- 1849 Christian Friedrich Lessing 死去。甥の Carl Robert Lessing が新聞を相続。
- 1860 Rellstab 死去。
- 1864 Ludwig Pietsch (文芸コラムニスト) 編集に参画。
- 1867 編集長に Hermann Kletke 就任。
- 1870 Gubitz 死去。後任教養欄編集者として Theodor Fontane 招聘。
- 1879 夕刊発行開始。
- 1880 編集長に Friedrich Stephany 就任。
- 1881 Otto Brahm, 編集に参画。しかし、酷評したヴァルナー劇場と衝突し、85年に新聞を去る。後任に, Paul Schlenther 参画。
- 1838 ベルリン最初の鉄道が, ポツダム近郊に開通。
- 1848 “National-Zeitung”, “Neue Preussische (Kreuz-)Zeitung”, “Kladderadatsch” 創刊。紙卸商 Leopold Ullstein ライプツィヒから上京。
- 1855 経済紙 “Berliner Börsen-Zeitung” 創刊。
- 1861 “Norddeutsche Allgemeine Zeitung” (政府応援紙) 創刊。
- 1866 ベルリンの人口約 70 万, 日刊紙 10 種。
- 1867 Mosse, ベルリンに最初の新聞広告代理店 “Annoncen-Expedition Rudolf Mosse” 設立。
- 1868 経済紙 “Berliner Börsen-Courier” 創刊。
- 1871 “Berliner Tageblatt”, Mosse により創刊。同年, 編集部が内部分裂し, “Neues Berliner Tageblatt” 新たに創刊。ドイツ・カトリック機関紙 “Germania” 創刊。
- 1874 出版の原則的自由を定めた「帝国出版法」施行。『シュペナー新聞』営業不振のため, “National-Zeitung” に吸収廃刊。
- 1876 “Berliner Zeitung” 創刊。
- 1877 Ullstein, “Neues Berliner Tageblatt” 買収。ウルシュタイン社設立。
- 1878 ウ社, “Berliner Zeitung” 買収。
- 1883 August Scherl, “Berliner Lokal-Anzeiger” 創刊号を 20 万部無料配布。

- | | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>1890 Fontane, 編集部を辞任。</p> <p>1898 Schlenther, 編集部を辞任, プルク劇場監督に就任。</p> <p>1899 Arthur Eloesser, Schlenther の後任として教養欄編集に参画。</p> <p>1900 編集長に Hermann Bachmann 就任。</p> <p>1901 教養欄編集長に Alfred Klaar 就任。</p> <p>1904 新社屋完成。しかし, この時期以降, 急速に増加するベルリン中産階級読者を, "Berliner Tageblatt" に奪われ, 社運は衰退する。</p> <p>1911 Carl Robert Lessing 及び L.Piet-sch 死去。フランクフルトの銀行 "Speyer-Ellissen" が『フォス新聞』を買収。"Vossische Zeitung" を正式名称とする。</p> <p>1913 Stefan Grossmann, 教養欄編集に参画。</p> <p>1914 銀行による新聞経営は失敗。ウルシュタイン社が正式に新聞経営を継承。編集長 Hermann Bachmann は引き続き留任。</p> <p>1920 Hermann Bachmann 死去。後任編集長に, ウルシュタイン社生え抜きの Bernhard 就任。</p> | <p>1884 社会民主党機関紙 "Berliner Volksblatt" (後の "Vorwärts") 創刊。</p> <p>1889 Brahm により会員制演劇鑑賞会 "Freie Bühne" 設立。Schlenther 發起人として参加。『フォス新聞』(Fontane) も積極的に鑑賞会活動を支援。</p> <p>1898 ウ社より "Berliner Morgenpost" 創刊。</p> <p>1899 Leopold Ullstein 死去。ウ社の経営は5人の息子が引き継ぐ。</p> <p>1904 "Berliner Zeitung", "B.Z.am Mittag" と改名。街頭販売専門紙となる。</p> <p>1908 Georg Bernhard, ウ社日刊新聞部発行部長となる。</p> <p>1909 "Berliner Allgemeine Zeitung", ウ社により買収。</p> <p>1910 "National-Zeitung", "Acht-Uhr-Abendblatt" と改名し初の夕刊紙となる。</p> <p>1913 国際通信社 "Telegraphen-Union" 設立。</p> <p>1914 ベルリンの日刊紙30種, 夕刊紙10種。</p> <p>1918 スパルタクス団機関紙 "Der rote Fahne" (後のドイツ共産党機関紙) 創刊。</p> <p>1919 帝国議会にて, 言論の完全な自由が立法化される。</p> <p>1920 ナチス, "Völkischer Beobachter" (1887 ミュンヘンにて創刊) を買収。</p> <p>1923 Grossmann, "Montag Morgen" 創刊。</p> <p>1928 ベルリンの新聞計147種。</p> |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

- 1930 Bernhard, ウルシュタイン家の内紛に容喙したとして編集長を解任。後任 Julius Elbau。
- 1931 過去最高の発行部数 81,000 部を記録。
- 1933 ナチスが『フォス新聞』没収の気配。先手を打ち、編集部内からユダヤ人記者を追放。11 月からは夕刊を廃止。
- 1934 3 月 31 日付をもって『フォス新聞』廃刊。
- 1933 全ドイツの社会民主主義、共産主義、労働組合の機関紙はナチスの命令で清算。「国民啓発・広報省」設立。出版担当部を併設。
- 1934 7 月、当局の圧力により、ウ社の株の過半が、ウルシュタイン家から外部に売却され、出版社の実質的経営権がウルシュタイン家の許を離れる。
- 1937 当局の圧力により、ウ社“Deutscher Verlag”と社名変更し、ナチス系出版社に転向。ウルシュタイン出版社は名実ともに消滅する。

„Die Vossische Zeitung“
— die erste Gelehrte Zeitung im deutschen Kreis —
2. Teil

Masafumi SUZUKI

Die Revolution im Jahr 1848, die die Abschaffung der Zensur sowie die allgemeine Pressefreiheit endlich verwirklichte, brachte aber als Nebenwirkung auch die harte Konkurrenz der Berliner Zeitungen mit sich. Die zwei großen Zeitungen, die bis damals den Berlinischen Journalismus monopolisiert hatten — die „Vossische“ und die „Spenersche“ —, gerieten deshalb in finanzielles Not. Besonders die finanziellen Schwierigkeiten der „Spenerschen Zeitung“ eskalierten so, daß sie nach der Revolution nur 26 Jahre lang auskommen konnte. Natürlich sah die „Spenersche Zeitung“ diese Reform der Verlagswelt nicht untätig. Die Vossische Zeitung als einzigen Konkurrenten stets in Betracht ziehend, bemühte sie sich, durch bereicherte gelehrte Seiten die harte Zeit zu überleben, während die „Vossische Zeitung“ immer mehr ihren Schwerpunkt auf ihre politischen Seiten legte. Vor allem trug J.F.Lamprecht zum Feuilleton der „Spenerschen“ in der Mitte des 19.Jh. nicht wenig bei. Man könnte sagen, dass sie durch ihn die „Vossische“ im Bereich der „gelehrten Sachen“ damals sogar in den Schatten stellte. Aber die „Spenersche“ besaß von Anfang bis Ende mehr oder weniger einen amtsblattsartigen Charakter, deshalb läßt es sich auch nicht leugnen, dass die amtsblattsartige Zeitung immer mehr die zum Liberalismus tendierenden Leser verlor. Die „Spenersche Zeitung“ ging 1874 ein.

Die letzte goldene Zeit hatte das Feuilleton der „Vossischen Zeitung“ am Ende des 19.Jh., wo Th. Fontane an deren Redaktion teil-

nahm. Seine Theaterkritik ist ja nicht zu aggressiv, was der täglichen Großzeitung sehr passte. Aber er hatte einen scharfen Sinn für neue Literaturströmungen und entdeckte mit O. Brahm Gerhart Hauptmann, die neuen Stützen des deutschen Naturalismus. Nur deswegen wäre Fontanes Beitrag zur „Vossischen Zeitung“ als bemerkenswert zu charakterisieren. Und oben genannter Brahm und P. Schlenther, der später als Direktor des Wiener Burgtheaters die deutsch-österreichische Bühnenwelt reformierte, gehörten auch damals durch Fontanes Einladung zu der Redaktion der „Vossischen“. Deren gelehrte Seiten standen deshalb ohne Zweifel in vorderster Front der deutschen Literatur um die Jahrhundertwende.

Nach Fontane brachte die Vossische Zeitung fast keine grossen Theaterkritiker hervor. Die Zeitung, die 200 Jahre lang im Besitz der Familie Voss/Lessing die journalistische Unabhängigkeit bewahrte, wurde 1911 wegen der finanziellen Schwierigkeiten an das Bankhaus „Speyer-Ellissen“, dann 1914 an den Zeitungskonzern Ullstein verkauft. Sie verlor dadurch allmählich ihren eigenen Stil, sowohl in den politischen als auch in den gelehrten Seiten. Dazu führte um die Jahrhundertwende die Bühnenwelt nicht mehr die Feuilletons der Zeitungen, sondern die neuerschienenen Literaturzeitschriften, z.B. „Freie Bühne“, „Gesellschaft“, „Insel“ oder „Pan“ usw.. Der Wert der gelehrten Seiten der „Vossischen Zeitung“ und überhaupt der Gesamtwert der Zeitung selbst verminderte sich in den 30er Jahren, und unter dem Druck der NSDAP stellte die „Vossische Zeitung“ 1934 ihr Erscheinen ein.

Als am frühesten herausgegebene und bis zum Ende ihren journalistischen Liberalismus bewahrende Berliner Zeitung leistete die „Vossische Zeitung“ einen unfassbaren Beitrag nicht nur zum Berliner-, sondern zum gesamten deutschen Journalismus. Besonders verdankt das hohe Niveau

der deutschen Feuilletons sowie Feuilletonisten von heute ursprünglich deren gelehrten Seiten. Wir können also in der „Vossischen Zeitung“ (insbesondere in der letzten Hälfte des 19. Jh.) das Ideal einer großen Tageszeitung beobachten, dass eine Zeitung mit der Regierung mehr oder weniger Kompromiss machend ihre Grundsatzideen als Ganzes durchsetzt, und damit in gerechter Weise an die öffentliche Meinung appelliert.

『人文研究』第100輯

正誤表

誤：151頁4行目

「1948年」



正：「1848年」